



彼女と傘と僕と

unamu

「どうぞ」

どしゃぶりの中を突っ走ろうか悩んでいた僕に、
彼女は真っ赤な傘を差し出した。
その鮮やかさに思わずたじろぐ。
彼女はにっこり笑って僕の手には傘を持たせて、
自分は雨の中を歌いながら颯爽と駆け抜けていった。

それはそれは美しく、
僕の目の前に広がる景色を
一瞬で別世界に変えてしまうほどだった。

そして僕はというと、
もちろんその真っ赤な傘を開くことはおろか、
持っていることもはばかられ、
周りの視線から逃げ出したい勢いにつられて、
彼女と同じように雨の世界へ飛び込んでいた。

いつもならそんなことするタイプじゃないのに、
なぜだか僕は雨に向かって歌っていた。

彼女の歌っていた歌が分からなくて、
おもわず僕の口から出たのは童謡の雨の歌で、
我ながら何てチョイスだとは思ったがしょうがない。

そのときの僕は、
彼女の見ていた世界をどうしても知りたかったのだから。

のちにあの曲は " 雨に唄えば " だと彼女から聞いた。
もちろん僕の見聞録にはなかったので、
そのあとこっそり調べて練習したのだけれど、
苦手な英語の歌詞と発音に苦戦して、
彼女の前でサプライズで歌うという僕のたくらみは、
あっけなく散ったわけだ。

「昨日、あの傘使わないで歌ってたね」

衝撃的な出会いの翌日（僕からしたらだけど）、
彼女が僕に話しかけてきた。

傘を返すのにどうしようか迷っていた僕の頭の中は、
とても助かったのが半分と
彼女の言葉にすごく動揺していたのが半分だった。

彼女が言うには、あのあとすぐに迎えの車に乗り込み、
そこからしっかり歌う僕を見ていたそうだ。
なんてこった。

僕の頭の中は見事に真っ白になった。

そして、そんな僕をよそに彼女からとどめの一発が来た。

「今日の放課後、空いてる？」

あなたとあの赤い傘で写真を撮りたいの」

僕は人の言葉に初めて軽くめまいを起こしそうだった。

この頃からすでに彼女は趣味で写真を撮っていて、常に被写体というものを探していたと言うけれど、僕のヒョロっとした身体のどこに魅力を感じたのか、いくら説明されてもまったく理解出来なかった。

しかもあの真っ赤な傘と一緒に撮るということに、僕が抵抗を感じないわけがない。

いや、その前にとっても大事なことがある。彼女は気づいていなかったかもしれないが、2日前に隣のクラスに転校してきたばかりの彼女は、その容姿で男女問わず校内では噂の人となっていた。僕はみんなの目の敵にされるのだけはまっぴらだった。

しかし彼女は僕の返事も聞かず、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴ると、「放課後、正門で待ってる」と言って、スタスタと教室に戻ってしまった。

クラス中の視線が僕に集中していた。
前の席のやつらが何か言っていた。
でも、僕だけ遠い世界にいるような感覚だった。

頭の中で彼女との会話が何度もリピートされて、
授業を受けるような心持ちではなかった。

僕は本当に別世界に来てしまったのかもしれない。



ところが僕は、
放課後になり全校生徒が通る正門に向かう勇気がなく、
彼女との約束をすっぽかした。

そもそも勝手に向こうが決めたことだ。
僕には関係ない。
と言い訳するようにそそくさと裏門から学校を出た。

家に戻ると、部屋に置きっぱなしだった例の傘が、
自分の主人はどこだと言わんばかりの顔をしていた。
僕は知らん顔でベッドに思いっきり身を投げた。

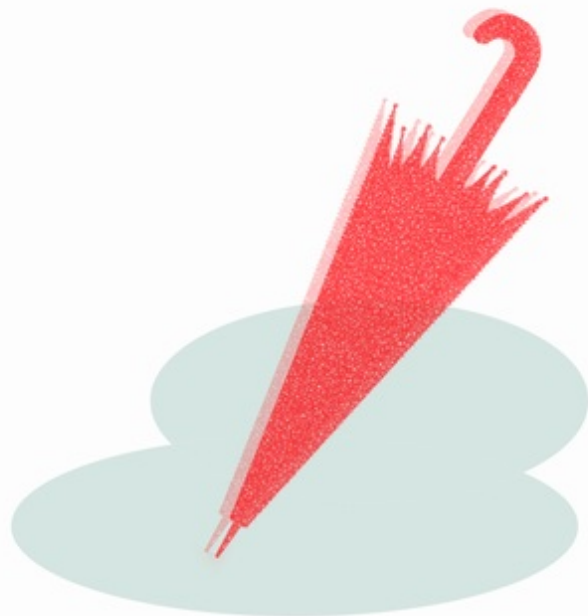
「ふー」と長いため息をつきチラリと横に目をやると、
傘の柄にS・Kという文字がキレイに掘ってある。
彼女のイニシャルだ。ちなみに僕も同じだ。
大したことのない偶然に何かを期待している。

もしかして特注の傘なのかもしれない。
確かにとても高級そうな感じがする。

ふと彼女の顔が浮かんで、次に罪悪感が僕を襲った。

友達がまだいないと言っていた彼女。
この街のこともまだ知らないと言っていた彼女。

僕はまぶたを閉じてもう一度ため息をついた。



いつの間にか僕は傘を手に取り学校へと走っていた。
すれ違いざまに何人かが僕と傘を交互に見ていたが、
僕はお構いなしに走り続けた。

学校の近くまで来ると、
約束の場所に彼女の姿を見つけた。
おそらく1時間以上は待たせている。
けれど彼女はスッと背筋を伸ばして美しく立っていた。

まだこちらには気づいていない。

僕は呼吸を整えながら彼女を見ていた。

そのとき、ポツリポツリと雨が降り出した。
お天気雨だった。

彼女は天を仰ぎ、
真っ青な空から降る雫を手のひらで受けとめていた。
他の生徒が小走りになる中、
昨日と同じ歌を口ずさんでいる。

僕はそんな彼女に真っ赤な傘を差し出した。

僕らは一つの傘に入って街を歩いた。
気がつくと雨は上がっていたけれど、
そのまま真っ赤な傘の下で二人、雨を楽しんでいた。

「あなたはやっぱり赤い傘が似合うわね」
彼女は僕を見上げて、そう言った。

その日に撮った真っ赤な傘と僕の(後姿の)写真は、
とある有名なコンテストで特別賞を取った。
彼女はますます輝き、
僕はますます女々しくなっていた。
あの出会いは、
別れの始まりでもあったのかもしれない。

テイクアウトしたコーヒーをすすった。
あの日彼女と歩いた街は、今日も渋滞だ。
『はい" 雨に唄えば" でしたあ。次のリクエストは〜』
僕は苦みをかみしめたまま、車のラジオを切った。

